

福島大教育 栗原 澄子

1. 時代の移り変りにともなって、衣服形態が変化することは自然なことであるが、私は今もって各国の民族服が、それぞれの国風や気候、民族の体格によく合う点から考え、日本の古代から現代に至るまでの衣服を出来るだけ明瞭にして、今後の日本の衣服がいかにあるべきかということを考えていたいと思う。そこで先ず、各時代毎に遺存する衣服を正確に調査するという基礎的研究をする。

2. 熊野速玉大社の御神服である“伊号唐衣”・“呂号袍”・“伊号袍”・“知号海賦裳”・“保号海賦裳”と称する遺品類の地質の名称と組織・文様・巾・丈・重量を調査した。地質は遺品の写真撮影。組織図は遺品を織物分解鏡で検しスケッチした。文様は遺品の上に薄紙をのせ文様を写し取りこれを画用紙に複写して墨入れした。巾・丈・重量は遺品の実測である。

3. 遺品類は後世の人の補修が多く加えられているが、当時のものと思われるところを出来るだけ正確に調査した。地質や文様は、先に報告した鎌倉時代の遺品と同様、神服にふさわしい豪華な生地と高貴な文様が用いられている。小葵文、窠文は鎌倉時代のものよりはるかに図案が固定化されて、時代の降っていることを物語っている。“海賦裳”は、古今を通じてこの大社の遺品にのみ見られるもので、この大社には8腰ある。